

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第四回

7章 花香

てんぼう
天保九年（一八三八）

長崎を去る日が、刻々と近づいていた。

正月、三年間の修学の終わりを前に、洪庵は長崎の通詞や奉行所に挨拶回りを始めた。

その頃には、一冊余分に筆写した「ゾーフ・ハルマ」を売りさばいて、相当の額を得たので、生活にも少しゆとりが生まれていた。

なので知り合いに餞別を贈ることもできたし、目を付けていた蘭書も購うことができた。

一月八日、洪庵は久方ぶりに思案橋を渡った。丸山遊郭に出向くと、街角には着飾った遊女たちが表に出て、大勢の見物人で賑わっていた。聞けば「絵踏」が行なわれる日だという。長崎の町人たちは年に一度、正月に切支丹ではない証として、マリア像を踏むのである。

洪庵とは縁のない世界だったが、その華やかさには目を奪われた。洪庵はためらいながら「引田屋」に入る。そこは長崎に来た直後に一度だけ足を踏み入れたことがある、丸山で一番の名店だった。「どんな娘がお好みでしょうか」と訊ねる女将に、「泰然先生を訪ねてきた」と告げた。

すると、一番奥まった部屋に通された。

そこは中華風の赤い欄間が派手派手しく、床の間に清国の絵が掛けられていた。

白塗りの盛装姿の女郎を侍らせ、寝間着姿で煙管をふかしていた泰然は、驚いて顔を上げた。

「章がおいらを訪ねてくるなんて、一体全体どういう風の吹き回しだい？」

「来週中に、長崎を辞去することにいたしました。つきましてはその前に泰然殿にひと言、御礼を申し上げに参りました」

紫煙を吐き出し、火鉢の縁に煙管をぼん、と叩くと、泰然はにっと笑う。

「きちんと挨拶をしに来るとは、なかなか殊勝なことだ。章も少しは大人になったようだな。ちょうど今、『絵踏』の後の厄払いの祝い膳をやるうとしていたんだよ。それにしても奇遇だが、おいらも来月、同じ頃に長崎を引き払うつもりなんだよ。まあ、潮時だよな」

二人の退去時期が一致したのは、決して偶然ではない。

年明け早々にニーマン商館長の江戸参府さんぶが予定されていた。すると長崎は半年近く、実質上もぬけの殻からになる。その後、商館長が交替すれば長崎は対応にばたつく。そうなると一年近く、修学する環境は落ち着かず、これまでのような成果はあがらなくなるだろう。

つまり、このタイミングで修学を切り上げるのは、妥当な判断なのである。

「おいらは足かけ四年、長崎で過ごしてきた。ずいぶん長くなったもんだ。おかげで蘭書も山のように買えたし、ここでつき合い始めた三宅良斎みやげこんさい、岡南洋おかなんよう、島田玄礼という連中も、おいらと一緒に長崎を去って、江戸で一緒に働きたいなんて言い出す始末よ。それだからちようど修学三年目の記念日の来月に長崎を去ることにしたのよ」

どうやら泰然という人は、どこに行っても舍弟をこしらえてしまう体質らしい、と洪庵は苦笑する。

そんな洪庵にも青木周弼あおきしゅうすけと岡海蔵かいぞうが合流していた。

他人を惹きつけるという点では、洪庵も泰然と変わらないのだが、つきあい方は真逆に見えた。

だからお互い、相手が自分に似ているのではないか、という自覚は全くなかった。

泰然は、杯さかずきを干しながら、しきりにぼやく。

「それにしても章の頑固一徹さには、ほとほと参ったよ。丸山に登らないのはまあ仕方がないとしても、おいらが何度誘っても、出島の医術はどうとう一度も見学に来なかったものな。章のお仲間の青木周弼殿や岡南洋殿は、おいらの誘いに飛びついてきたもんだが。百聞は一見に如かず、と言うが、実際の蘭人医師の手技を見学するのは本当に貴重な体験になったんだぜ」

そんな風に嘆なげく泰然を見て、洪庵は両手を膝ひざの上に揃えて、背筋を伸ばす。

「私は、医学とは、窮理きゆうりにつながる真実を重ねていくことだと思っております。切った張ったは、二の次です」

「ふむ、章は本道（内科）、おいらは外科の違いなんだろうな。けどな、章よ、そいつあ思い込みがすぎるってもんだぜ。蘭語や知識を頭に詰め込んだだけでは、患者は治せやしない。実地の現場での治療を見ることは、蘭書を読むよりも、もつとずっと大事なことなんだぜ。おいらは、しぶるニーマン商館長おじに脅おどしてすかして、泣きついてようやく、日本に同行してきた蘭医の外科術を間近で見せてもらったんだ。ありやあ凄あさまいもんだったぜ」

「しかし、出島は出入りが禁じられておりますので」

「わからんちんのお上かみが作った、どうしようもない規則をクソ真面

目に守ったところで、何のご利益もないだろうよ」

「私はあなた様とは考え方が違います。けれども泰然殿のおかげで、ならばやしえいけん 榎林栄建・そうけん 宗建両先生とも親しくさせていただき、しゆとう 種痘術についても参考になりました。種となる牛痘菌の輸入は失敗続きですが、ぎゆうとうきん 牛痘菌の輸入は失敗続きですが、じんとう 人痘法には『清国式』と『トルコ式』の二通りがあつて、うみ 膿ではなく瘡蓋を使う方法もある、ということを知ることができたのは、大きな成果でした」

「人痘法は、効果はともかくとして、確かに使い勝手はよさそうな医術ではあるよな。それにしても、『徳を守り則を越えず』を守り通すとは、いかにも章らしいよ。けどな、おいらにはカラクリが全部、わかっちゃまったんだよ。江戸の蘭学は、長崎の二番煎じにすぎない。

長崎の通詞は気前がいいけど、江戸の連中はこすつからい。長崎で最新の処方箋を二、三枚写して来ただけで、やれ秘伝だ、やれ秘薬だともつたいばかりつけて、高い金を取って教えたり治療をしたり、そんな連中ばつかだぜ。まあ、伊東玄朴殿けんぼくがその象徴だと思つがね」
「果たしてそうなのでしょうか」と洪庵は、尊敬する恩師・坪井信道つばいしんの顔を思い浮かべながら言った。

「ああ、間違いないな。江戸蘭学の権威で、蘭学生なら誰もが最初に読む『蘭学階梯』らんがくかいていの作者の大槻玄沢殿おおつきげんたくでさえ、長崎でほんの二、三カ月間、学んできただけだ。それで江戸で蘭学の顔役みたいな扱

いをされているが、ちゃんちゃらおかしい話だぜ。長崎の二大巨頭の、吉雄耕牛先生よしおこうぎゆうと本木良永先生もときよしながの足元にも及ばんよ」

そこまで言った泰然は、洪庵の顔色が変わったのを見て、あわてつけ加えた。

「もつとも戸塚静海先生とつかせいかいや坪井信道先生ひらゐのぶみちみたいな例外も若干おられるのも確かだが、他の弟子がしゆつらん出藍ほまの誉れになることは、まずないだろう。要は江戸の蘭学はセコくて総じてレベルが低いってことよ」

泰然の言葉には、猛毒が含まれていた。それが単なる誹謗ひぼうでないことは、洪庵も首肯しうきんせざるを得ない。

ただ、たとえ心の底ではそんな風に思っていたとしても、洪庵にはとても口にはできそうにないことだった。

考え込んでしまった洪庵の顔を覗のぞき込んだ泰然は、にっと笑う。

「けどおいらは、そんな風に気前がいい長崎の通詞連中の、更にその上を行きたいと思ってるんだ。ニーマン殿に直接教わってわかったことは、蘭書をひたすら読むだけでは、蘭医学しんずいの真髄は修得できないってことだ。今、江戸や浪速なにわには蘭学塾が乱立しているが、実地の医術を教育している塾はどこにもない。おいらに言わせれば全部、すつとこどっこいだよ。長崎にある医塾だって合格点には届かねえ。というわけで江戸に戻ったら、おいらは医業と学問を両立させる、本物の蘭学塾を始めようと思っっているんだ」

洪庵は驚いて目を見開き、まじまじと泰然を見た。

「奇遇ですね。私も浪速で、蘭学塾を開こうと考えていたのです」

やはりこの人とは妙な縁があるな、と思いながら言う。それは、

泰然に反発している洪庵が、珍しく本音を吐露したものであつた。

「なんと、章も学塾をやるつもりだったのか。はは、またまた勝負つてわけか。今度こそ江戸と浪速とで、どちらが成功を遂げるか、

本気の勝負と洒落込もう。まあ、今回もおいらの勝ちだろうけどな」

「望むところです。今度は負けません」

「お、言うねえ。長崎に来て、章も少しは性格が変わったようだな。

よしよし」

洪庵は首を横に振る。

「いえ、それは違います。それは昔から私の望みなのです。富めるも貧しきも分け隔てなく、学問をやりたい若人のため、雨風を凌いで飢えることがない、大きな庵を作りたい。私の家は貧しく、学問ができない状況でした。でも師匠や善意の方たちのおかげで、存分に学ぶことができました。今度は私とその御恩を返す番なのです」

そう言いながら、そうか、師匠の中天游や坪井信道の薫陶を次の世代に伝えていくことが自分の天命だったんだ、と洪庵は今さらながら気づかされた。

泰然と相対していると自分の姿がまざまざと見えてくる。この方

は自分にとって、すがたみ姿見のようなものなのかもしれない、とちらりと
思い、あわててその考えを吹き消した。

「は、章は偉いもんだな。でもその考え方は、おいらにはちつとも
わからねえや。ま、いいや。ところで浪速に戻る前に、ちよつくら
お前の見解を聞いておきたいことがあるんだが」

杯をあおった泰然は、隣に侍っていた遊女を下がらせた。

そして珍しく声を潜めた。

「先年の大事を起こした大塩平八郎殿について、章はどう思ってい
るんだ？」
おしおへいはちろう

昨年二月、大坂奉行・大塩平八郎は乱を起こしたが、わずか二日
で鎮圧されてしまった。

その際、浪速で起こった大火は「大塩焼け」と呼ばれた。

かわらまち瓦町の百軒の内五七軒と半分以上が焼け、さだの中医院も天游の
ししさい「思々齋塾」も焼け落ちた、という便りに、洪庵は胸を痛め、気を
揉んでいた。

「大塩さまは、優れた見識をお持ちのご立派な方だった、と耳にし
ております。それだけに、あのような無謀な振る舞いをなされたこ
とは、残念でなりません」

「章ならそう考えるんだらうな。おいらは真逆でね。大塩殿はよく
やったと褒めたいよ」

「しかしながら大塩殿は、天下の謀反人でございます」

すると泰然は腕組みをして、真顔で言う。

「謀反には謀反の理がある。天保の飢饉で世はえらいことになっていた。民を憂いての決起、まことに天晴れ。越後で後追いの一揆もあり、民をないがしろにしたお上の權威は揺らいでいる。大塩殿の乱の直後、英明な佐倉藩主堀田正睦殿を大坂城代に任命したのも、お上の焦りからさ。もつとも堀田殿は二カ月足らずで、江戸の西丸老中に取り立てられてしまったが」

「なんと。泰然殿は浪速の事情にも通暎なされているのですね」

「まあな、あたぼうよ、なーんてな。種明かしすると、親父殿からの情報なんだよ。親父殿は、蘭学に強い関心をお持ちの堀田殿と、昔から懇意でね。おいらから得た長崎の情報をお伝えしていたらしいんだ」

泰然は立ち上がり、抽斗から一通の書状を取り出すと洪庵に手渡した。

洪庵がその書面を開くと、泰然は言った。

「そいつは蜂起の前日に大塩殿が幕府の老中に当てた書状の写しだよ。これを受け取った江川英龍殿が、政治判断で握りつぶしたが、老中の堀田殿が大坂に赴任する際に渡された。それを親父殿が拝借して筆写し、おいらに送ってきたのさ」

そこには蜂起した理由が切々と記されていた。奉行や城代の不正蓄財が民を苦しめていることが縷々綴られた文言には、毛筋ほどの乱れもない。これが世に知られたら大塩殿の評価は、今とは違ったものになっただろう。だがその時には幕府の威信は地に落ちる。

幕府がこれを握りつぶした理由はよくわかる。一読した洪庵は震える手で、書状を返した。

泰然がぼそりと言った。

「これでも章は、わからんちんのお上が作った、どうしようもない規則を、クソ真面目に守り続けようというのかねえ」

泰然の言葉に内心では半分同意しつつも、洪庵は素直にうなずけなかった。

泰然が情報収集に長けていることは、普段の話しぶりや、漏れ聞こえてくる日頃の活動ぶりでも知れた。

商館長ニーマンの邸宅を足繁く訪れて、医学のみならず海外の形勢、西洋文物、果ては兵術や兵器についても、幅広く最新知識の薫陶を受けている、というウワサもあった。

博学なニーマンは、泰然にはぴったりの指導者だったようだ。

加えて檜林栄建に紹介され、町年寄の兵法家、高島秋帆の塾にも出入りしたと聞く。

その行動は医学修学を大きく逸脱して、洪庵の目には、則を

超えた行動に映った。

——不敬である。

洪庵が泰然に下した評価は、泰然が洪庵に持った印象と、まさに好一对だこういつつたいった。

——杓子定規しゃくしじょうぎで堅物すぎる。

そんな本音を互いに隠したふたりは、しばらく見つめ合った。

ようやく、洪庵が口を開いた。

「お上が決めた法を守ることで、秩序が守られるのです。たとえお上ふはいが腐敗ふはいしていても、私は法と秩序を守り続けたいと思います」

「は、章は本当に、どうもならん石部金吉いしべきんきちだねえ。ま、それでもおいらと章の目論見もくろみが一致したのは珍しいしめでたいことだ。先のことと考えると、なんだかわくわくしてくるな。おいらたちの間にあじやつかんる若干じやつかんの食い違いはひとまず置いておいて、別れの祝杯を上げるとするか」

注がれた酒を拒まず、洪庵は杯を干した。

実は洪庵は長崎滞在中、オランダ人と直接会うことは極力避けていた。

許可なく異人と会うことを禁じた、幕府のお達しに忠実だったためだ。

その代わり、唐通事とうつうじとは親しくつきあった。その姿勢は蘭学修学にきた他の医師とは、毛色が違っていた。洪庵は父に叩き込まれた漢学の素養を大切にし、下手ながら漢詩も作った。

それは師・宇田川玄真うだがわげんしんの方針でもあった。玄真は養子の宇田川榕庵あんに、最初は漢方の原典である「素問そもん」「靈枢れいすう」「傷寒論しょうかんろん」などの漢方の古典や本草学ほんぞうがくなどを深く学ばせた。

蘭語の習得にはその方が早道だと考えたからである。

そのことは大きな成果を出した。著名な西洋植物学者となった榕庵は天保五年（一八三四）、日本初の本格的な西洋植物学書である「理学入門・植学啓原しよくがくけいげん」を出版した。ここでは今日も使われている「元素、酸素、窒素ちつ、水素、炭素、細胞」などの化学用語の新語を創出している。

それは玄真の「漢学を基礎とする蘭学修得」という教育方針が結実した結果だった。

そうした薫陶を受けた洪庵は、漢学をおざなりにしなかった。その点では唐通事のいる長崎は、洪庵の目には、蘭学のみならず漢学の最前線の土地とも映ったのだ。

洪庵が親しくつきあったのは、唐大通詞になったばかりの穎川四郎八えがわしだった。彼の薫陶くわうたうに触れたことは、洪庵の教養を深めるのに役立つ、無私の人となりにも感銘を受けた。漢方についても造詣が深

く、洪庵は実際の開業に役立つ知識を習得している。

だが蘭方医たちの間には、漢方医に対する根強い反感があったために洪庵は、穎川四郎人との交際を、あまりおっぴらにできなかった。

洪庵は唐人街の丘の中腹にある興福寺で、海を見ながら穎川四郎人に別れの挨拶をした。

「穎川さまには、漢籍の本質を教えてくださいました。ありがとうございます。ございました」

その時、寺の境内に天妃像を捧げ持つ唐人の一行が、銅鑼を打ち鳴らしながら入ってきた。不思議そうな顔でその行列を眺めた洪庵を見て、穎川四郎人は微笑する。

「修学に一意専心の洪庵殿は、長崎の行事のことはあまりご存じなさそうですね。この行列は『菩薩揚げ』といい、洪庵殿の旅立ちに相応しい、縁起のよいことです。唐船は船内に、航海の安全を守る天妃を祀るのですが、上陸している間は、祈りを捧げる者がいなくなるので、興福寺、崇福寺、福濟寺の三寺で預かり、お守りするのです。その渡御と巡り会うとはまさに吉兆です。航海の安全を守ってくださいった天上聖母、媽祖さまが洪庵殿の行く末もお守りくださるでしょう」

そう言った穎川四郎人は、赤く太い蠟燭を手にとると、それに火

を点した。ともしび

「このようにして、蠟燭の灯火ともしびに願い事を託すのです。今、私は、天上聖母さまに、洪庵殿の念願成就をお願いしたのです」

そうして彼は、天上聖母に似た、穏やかな微笑を浮かべた。

聖母という言葉を耳にした洪庵の脳裏に、名塩なじおの許嫁いなすけの面影おもかげが、ふわりと浮かぶ。

だが三年間の長崎修学の間に、可憐かれんな顔立ちの印象はすっかりぼやけてしまっている。果たして彼女は、自分のことを待っていてくれるだろうか、と思うと、胸がざわめいた。

そんな洪庵を眺めやった颯川四郎八は、ぼつんと言う。

「長崎に留学してくる意欲のある方はみな、蘭学に流れていってしまします。漢方の情報も同じように入ってくるのですが、それは従来の医家の人たちが独占して秘伝としてしまうので、あえて長崎で修学しようという者は少ない。これではいずれ医の世界では漢方は蘭方に取って代わられてしまうでしょう。でもそれは一介の通事の方では、どうにもならないことです。そんな中で、洪庵殿とお会いできたのは思わぬ幸せでした。特に痘瘡とつそうの予防になる種痘で、これまでの人痘ではなく牛痘苗びゅうびょうというものがあるのを教えていただいたのは、とても有意義でした。唐通事としても、オランダに遅れることなく、清国から輸入できないか、道を模索していきたいと思

ます」

「漢方と蘭方で競争しよう、というわけですね。潁川さまのようなお方が、そのようにお考えでおられるのは、大変心強いです。長崎では檜林家と吉雄家を中心になって、蘭館長に働きかけているようです。私としては清国であろうとオランダであろうと、牛痘さえ手に入ればいい、と考えています。でも当座は人痘で対応するしかないさそうです」

「そうだろうと思い、賤別に洪庵殿に相応しい品を進呈します」
手渡されたのは、青花の磁器の壺つぼだった。蓋ふたが蠟で密封されている。

「その壺の中には、痘瘡かぶに罹かった子の瘡蓋かさが封入してあります。清国の使者から脇荷わきにとして、いただいたものです。どうかお納めください」

「こんな貴重なものを、いただいてしまって構わないのですか？」

「私の元にあるより、洪庵殿がお持ちになった方が世のため人のためになりますから」

鮮やかな青い壺を掲げた洪庵は、深々と頭を下げた。

「誠にかたじけないことです。僭越せんえつながら不肖ふしよう洪庵、世のため人のため、この貴重な品を、ありがたく拝受いたします」

そんな彼の隣を「菩薩揚げ」の行列が、盛大に銅鑼を鳴らしなが

ら、去っていく。

痘瘡の瘡蓋入りの青い壺と、惜別せきべつの漢詩を贈ってもらった洪庵は、
頼川四郎人と長崎に別れを惜しみつつ、興福寺を後にした。

洪庵にとって、輝かしい青春となった長崎留学は、終わりを告げ
た。

日見峠ひみとうげの頂いただきに立った洪庵の脳裏には、長崎で過ごした三年の月
日が、走馬灯そうまどうのように蘇よみがえる。

初めてこの峠に立った時、長崎の街は見知らぬ顔をして、広大で
茫洋ぼうようとしていた。だが今、振り返った長崎は意外にこぢんまりとし
て、あちこちに小さな逸話ざんしの残滓ざんしが思い浮かぶ。

長崎は洪庵にとって、第三の故郷となったかのようにだった。

そんな感傷を振り払うようにして歩を進め、日見峠を越えた洪庵
はもう振り返らなかった。

こうして緒方洪庵は、三年の月日を過ごした長崎を去ったのだっ
た。

*

天保九年（一八三八）一月。

緒方洪庵は浪速に戻る前に、故郷あしもりの足守あしもりに立ち寄った。

久々にお目に掛かった父母に長崎留学の日々を報告した。他にも報告しなければならなかった。『洪庵』と改名したことと、八重やえを嫁にするかもしれない、ということだ。

改名については、父が「医者らしい名前ではないか」とあっさり喜んでくれた。

八重については長崎に行く前に、縁談を勧めていた母が反発するかと怖おそれたが、洪庵自身が八重を気に入っていることを察したらしく、反対はしなかった。

拍子しゅうし抜けしながら、洪庵は蠟で密封した壺を取り出した。

「これは長崎留学の成果です。『人痘』といい、軽い痘瘡に罹ること、重い痘瘡にならないようにする、清国伝来の医術です。できれば兄上のお子に試してみたいのですが」

すると母は眉まゆを蹙ひそめ、父は腕組みをして、二人とも黙り込んでしまった。

——やはり無理だったか。

洪庵はそれ以上は何も言わず、その壺を、日の当たらない自分の机の上に置いた。

ところが数日後、父がいきなり、「出掛けるぞ」と洪庵に声を掛けてきた。

二人は連れ立って川っ縁の街道を伝い、五分ほどで陣屋町じんやまちの中心

に着いた。子どもの頃、父に連れられて藩校に通ったことが思い出された。

もう少し先に行けば、藩主さまの屋敷があるはずだ。

街道筋の入口に立派な屋敷があった。「醤油」という旗が掲げられている。

「石坂さま、息子の洪庵を連れてきました」

父に改まって洪庵、と呼ばれたことに、彼は一瞬、小さな戸惑いを覚えた。

中から姿を現したのはどこか風格を感じさせる、初老の男性だった。

彼は目を細めて洪庵を見つめると、「惟因殿のご自慢のご子息は、誠に立派な青年ですな」と言った。

照れ笑いを浮かべた父・惟因は洪庵に、相手を紹介する。

「こちらは足守藩のお匙医の石坂桑亀先生だ。先生は醤油の醸造でも成功し、『銭屋さま』と呼ばれておる。その利で困窮している藩の財政を支援してください、お世話になりっぱなしなのだ」

石坂桑亀は、微笑を絶やさず、うなずいた。

「長崎留学からお戻りになられたばかりとのこと。私もかつて長崎留学して、シーボルト先生に師事したことを思い出します。そこでは医学の他に、舎密学（化学）なども学びました。それを応用して、

醤油の醸造の手法を編み出し、商売をしているのです」

洪庵は目を輝かせる。

「なんと、シーボルト先生に直接教わったとは、羨ましい限りです」
そう言えば、シーボルトという人は、医家というよりはむしろ軍
人か、商人か、博物学者のようで、医者には思えなかった、とかつ
て泰然から聞いたことがある。

石坂桑亀は農家出身で、十三で医家を志し、京で「万病一毒説」
まんびょういちどく
の古医方こいほうの吉益南崖よしますながいに師事し、二八歳で紀伊きいの名医はなおがせいしゅう、華岡青洲の門
下になり外科術を修学した。その時、洪庵も師事した宇田川玄真の
「医範堤綱」いはんていこうを読み、西洋医学を志したのだという。

桑亀は、洪庵が密かに願いながらも、決して叶えられることにな
かった修学を、全て果たしていた。

心底、羨しく思った洪庵は、なんとか桑亀との接点を見出そうと
して、言った。

「私も玄真先生に師事いたしました。伸びやかな先生で、とても可
愛がっていただきました。大坂の中天游先生に師事した時に、シー
ボルト先生にもお目に掛かったことがあります」

「それはご縁が深いですね。私は長崎から戻り故郷で医業を開業し
たのですが、藩主きのかみの木下さまきのしたに侍医じいに招かれ、あなたの父君と同僚
となったのです」

それを受けて、父が言う。

「長崎留学の先輩の桑亀さまに、お前の『人痘術』について、ご相談してみたのだ」

桑亀は、ぐい、と身を乗り出した。

「実に素晴らしいお話です。私も全面的に協力させてもらいます。

人痘術がうまくいったら、直ちに他の子どもにも続けて接種できるよう、手筈を整えておきましょう」

その言葉を受けて、父は腕組みをしてうなずいた。

「とまあ、桑亀さまにそこまで言われては、もはや儂わしには反対できません。そのことを踏まえた上で馬之助うまのすけに相談したら、洪庵殿が長崎で学んできたことであれば協力します、という、色よい返事をもらえたのだ」

洪庵の脳裏に、八歳の自分と共に痘瘡に罹った兄の面影が浮かぶ。

洪庵は一番の気がかりを口にする。

「母上は納得されたのですか？」

「心配するでない、アレには儂からよく言い聞かせておく。なにしろこれはもはや、緒方家を越えた、足守藩の一大事となったのだからな」

洪庵は身震みぶるいする。

「蘭流の接種法も学んでこられたのですか？」と桑亀が訊ねる。

「手技は長崎の蘭流医家の大家、榎林栄建・宗建両先生にご指導を仰ぎ、秘伝のランセットも頂戴いたしました。清国の手技については唐大通事の穎川四郎八さまに教わりました。けれども、今回は長崎で学んだ『トルコ式』でやろうと思います」

桑亀は目を輝かせた。

「ほう、『トルコ式』ですか。『清国式』は、延享二年（一七四五）えんきやうに長崎に来航した清国の医師・李仁山りじんせんが伝えたのが最初と聞いておりますが、確か瘡蓋を粉末にして鼻から吸引させる方法でしたな。

私は寡聞かぶんにして、『トルコ式』については存じ上げておりません。どのような手法なのか、小生しょうせいにご教示願えますか」

「腕か足に傷をつけて、そこに患者の瘡蓋の粉末をすり込むのです。そのためにこの、ランセットという専門の道具を用います。『トルコ式』は寛政五年（一七九三）、出島の蘭医ケルレル殿が長崎で実施したのが最初だそうです」

ランセットをいつもお守りのように持ち歩いていた洪庵は、袋を懐ふししろから取り出した。受け取った桑亀は目を細め、鋭い刃先を見つめた。それから銀色に輝く刃を洪庵に返すと、大きくうなずいた。

「よろしい、やりましょう。最初の例がうまくいったら、足守の医の力を結集します」

その確信に満ちていた声を聞いた洪庵は、懐に抱かれたような安

心感を抱いた。

帰宅してことの成り行きを報告すると、ふぜん 憮然としていた母は、ひと言だけ言う。

「本当に大丈夫なのでしょうね」

その言葉が、肩にずしんとのしかかる。

だが、もう後には引けない。

「大丈夫です」と言って笑おうとしたが、頬は引きつっている。

——そんなことは、誰にもわからない。

我ながら無責任だと思う。

だがこれが成功すれば、数千、数万の子どもの命を救うことになる。

こうなったら、もうやるしかないのだ。

天保九年一月下旬、緒方洪庵は、兄・馬之助の子である、甥おいと姪めいに人痘種痘を実施した。

二人の子どもは人痘の接種後、腕が腫はれ、高熱を発した。

洪庵は気が気でなかったが、しばらくすると無事かいゆに快癒したため、胸をなで下ろした。

けれども、桑亀と一緒に準備していた、他の子どもへの接種は見送ることになった。

「これでは痘瘡に罹ったのと同じことではないか」

そう呟いた母の言葉が胸に刺さった。

寛解の祝いの席で、母の視線を痛く感じて、洪庵は居心地が悪かった。

長崎留学の凱旋がいせんとは言い難かったが、これが機縁となり一年後の

七月、洪庵は足守藩主から捨て扶持ぶちの三人扶持を賜った。

それが足守藩の侍医・石坂桑亀の進言によるものだったことは、言うまでもない。

*

天保九年七月。

緒方洪庵は、名塩の医家・億川百記おくかわひやつきの娘、八重と祝言しゅうげんを挙げた。

洪庵の隣には、白無垢姿しろむくすがたの八重が慎ましく座っている。

彼女は、出会った頃の面影を残しつつも、十七歳の可憐さが匂い立つようだ。

——私は果報者だ。これ以上、望むものは何もない。この先は蘭学にわが身を捧げて、後進を育てることに専念しよう。

京人形のように整った横顔を見つめながら、二九歳の洪庵はしみじみと思う。

洪庵の母は体調を崩し、父は公務が忙しく、式に出席できなかった。

母が持ちかけた縁談を断つたのを、気を悪くされたのでは、という洪庵の憂慮ゆうりよを晴らすためか、父と母からそれぞれ、八重宛てに温かい手紙が届いた。

そこには懐かしい母の筆で「洪庵殿は幼きころより病弱でしたゆえ、なにとぞよろしくお願いいたします」と書かれていた。

幼い頃よく熱を出し、母が一晩中寝ずに濡れた手拭いを替えて看病してくれたことを、洪庵は思い出した。

仲人の二代目・中環なかつたまきを襲名した伊三郎いさぶろうが高砂たかさこを謡い、塾生が思い思いに師へ祝いを述べる。

座は次第にほぐれ、笑い声があちこちに響いた。

やがて和やかな祝言が終わり、人々が三々五々、新郎新婦に挨拶をして辞去していく。

いつまでもグズグズと粘っていた親族や塾生も、ひとり、ふたりと姿を消した。

最後に、岳父がくふとなった億川百記が残った。

「ご立派になってお戻りになりましたなあ。天游さんも本望でしょう。頼母子講たのもしこうに参加した者もみな大満足しとります。その上儂は、

三国いちの婿殿むこを迎えることができました。もう、いつお迎えが来

でも悔いることはありません」

洪庵は正座すると、たたみ畳に手を突いて、深々と頭を下げた。

「舅殿しゅうと、開塾の手配を始め、諸々本当に感謝しております。この御恩はこれからみなさまにお返しして参ります。どうか今後もし指導賜りますよう、よろしくお願いします」

「どうかお顔をお上げください。そんなことをせずとも、婿殿のお気持ちはもう十分みなに伝わっておりますから」

洪庵は三カ月前の四月、瓦町で医業を開業し、「ていやくせうじゆ適々齋塾」と名付けた蘭学塾を開いていた。

師・天游の「思々齋塾」にあやかった名で、変えた一文字は、かつて上総国かずさで開いた適塾で使ったものだ。

「適々」という名の由縁について、塾生はあれこれ詮索せんさくし、論語が原典だの莊子そうしの引用だのと喧やかましかったが、洪庵は笑うばかりで、彼らの言うがままに任せた。

まさか師・天游の「適当さ」に憧れて選んだ言葉だとは、今さら口が裂けても言えない。

やがて「適々齋塾」は名前を縮めて単に「適塾」と呼ばれるようになる。

適塾の建物は、街の半分以上が焼け落ちた「大塩焼け」でも焼け残った験げんのいい建物だ。

その上に、長年の想い人だった八重を射止めた洪庵は、幸先がよい、としみじみ思う。

「婿殿、邪魔者はこれで失礼します。八重、しっかり洪庵殿にお仕えするのだぞ」

「へえ」と八重は、凜とした声で答えた。

家には洪庵と八重のふたりきりになった。静寂が部屋を包む。

夜の蝉がぢぢ、と鳴いた。

洪庵は立ち上がり、軒先に出た。八重は従う。

「覚えていますか、天游先生の四九日の法要で初めてお目に掛かった時、一緒に夜空を見たことを」

「へえ、もちろんどす」と八重はうなずいた。

洪庵は続けた。

「あの時の私は長崎留学を控え、身を立てるあてもなく、その後どうなるかも、皆目見当もつきませんでした。ただあの時に思ったのです。もしもあなたが私の側にいてくれたら、どんなに素晴らしい人生になるだろう。そうしたら私は全てを投げ打ち、学問に専心できると」

「あても、ずっと章さまのお側にいたい、と思うとりました」

その言葉を聞いた洪庵は、真っ直ぐに八重を見つめた。

「お父上は私を三国いちの婿殿とおっしゃいましたが、それは間違

いです。八重さんと一緒になれた私こそ、三国いちの果報者です」

八重は頬を染めてうつむいた。

夜風が、ふたりの身体からだを撫なでていく。

やがて八重が口を開いた。

「あの、ひとつ、お願いがあるのですが」

「なんででしょう」

「長崎に行かれて章さまは、洪庵さま、とお名前を変えたのですね。

でもふたりきりの時には今までのように、章さま、とお呼びしても
よろしいやろか」

「ええ、八重さんの好きなように呼んでください。洪庵という名は
お嫌いですか？」

八重は首を激しく横に振る。

「そんなことはあらしません。けど、あてには洪庵さまという名は
少し怖いのです。なんだか、本当の章さまとは違う気がして」

懸命な八重の言葉に、洪庵は胸を突かれた。

八重に言われるまで、自分の姿を振り返ったことがなかったこと
に、改めて気がつく。

「確かに、それはそうなのかもしれません。私は、塾生のため、後
学の者たちのため、病やまいに悩しむ衆生しゆじやうのため、広い庵を作りたとい
う気持ちで改名したのです。その目的に向かって走ることばかり、

考えていました。言われてみれば確かにそこには、私自身の姿はない気がします」

そう言いながら「洪庵という名は、かみしも袴を着たみたいでいか厭めしい」と言つた泰然を思い出す。

誰よりも合口あいくちの悪い相手と、誰よりも愛おしいと思う女性が、洪庵という名に同じような気持ちを抱いたという偶然を思った。

私は何か、間違えたのだろうか、と思わず考え込んでしまう。

うつむいた八重が、洪庵そでの袖をそつと引く。

その頬を、月光がほの白く照らし出している。紅べにを引いた赤い唇が動く。

「あては、章さまが周りの人を思うあまり一所懸命になりすぎて、お身体を壊してしまうことが心配なんです。洪庵さまはきつと、そんな風に生きていくのやと思います。でも、あての前では、章さまでいてほしいのです」

「それを聞いて、ほつとしました。では私もひとつ、わがままを言わせていただきますよう。ふたりでいる時には、あなたを『花香』はなかと呼ばせてください。長崎ではいつも、旅立つ前にいただいた短冊たんざくを眺めていたので、私の中では八重さんは『花香』なのです」

「へえ」と小声で答えた八重は真っ赤になつてうつむいた。

そしてはつと我に返り、洪庵の袖を引いていた手を離れた。

洪庵はその華奢きやしやな手を握り、小柄な身体を引き寄せる。
ひとつの影になった二人に、降りかかる月光が、庭先の岩を濡ら
していた。

当時の瓦町は、「大塩焼け」で半分以上の家が焼け落ちていた。

瓦礫がれきと化した町で焼け残った適塾の借家は、舅の億川百記が見つ
けてくれた。

格安で借り受けることができたのは、請人うけにんを引き受けてくれた
大和屋喜兵衛やまとやきへえのおかげだ。

恰幅かつぶくのいい大和屋は、いつも扇子せんすでばたばた身をあおっている。
彼は中家の医院に出入りしている西洋薬種商やくしゆしやうで、かつて洪庵もさ
だに連れられて店を訪れたことがある。

「適塾」の前評判は高かった。

なにしろ浪速では橋本宗吉はしもとむねきち一門で中天游の愛弟子でもあり、江戸
の安懐堂あんかいどうでは塾頭を務め、長崎では蘭書の翻訳で名を挙げた俊英しゆんえいが
旗揚げした塾である。その盛名を慕って、入塾者は引きも切らな
った。

最初に弟子入りしたのは有馬撰蔵ありませつぞうという青年だった。

次いで「安懐堂」から山鳴剛三やまなりと大戸郁蔵おおどいくぞうという二人の俊才が入
塾した。

親戚同士の二人は幼なじみで、故郷の福山藩の陣屋町、笠岡かさおかに帰っていた。そこは、足守からも近かった。

坪井信道の「安懷堂」で、洪庵と同窓だった二人は、洪庵の開塾を知って、矢も楯たてもたまらず、いの一いち番に駆けつけてきたのだ。

江戸での二人の修学ぶりをよく知る洪庵にとって心強い援軍だった。

だが二人は、何から何まで全てが対照的だった。

その名の如く剛直ごうちきな性質で一を聞いて十を知り、目から鼻に抜けるが如き才子の山鳴剛三は、やることなすことが煌きらびやかな、金ながしのような男だった。

かたや大戸郁蔵は人付き合いが悪く、学問に没頭し身なりも構わない、いぶし銀のような青年だった。

初めて郁蔵を見た時、洪庵は「牛のような男だな」と思った。

洪庵は、自分の幼名が、驛せいのすけ之助だったということを思い出した。

驛牛あじうしとは赤牛の意だ。

この青年とは縁が深いのかもしれぬ、と思った。

大戸郁蔵は上京前に故郷で「ゾーフ・ハルマ」の筆写を終えていたという、破格の人物だ。

そのため「安懷堂」に入塾時に、洪庵に比肩ひけんする力を有しており、

洪庵も同格に遇した。

學問に熱中するあまり身なりに構わず、変わり者だと思われていた。読書と酒をこよなく愛し、他はどうしても構わない、と切り捨てても平氣の平左へいざという、凶太いところもあった。

洪庵はそんな郁蔵を、塾頭に任じた。

好対照な山鳴と大戸のふたりは、「適々齋塾」に住み込み、内塾生となった。

そうして日々の暮らしと修学に励んでいるうち、「適塾」の原型が作り上げられていった。

けれどもその後、そんな二人の運命の明暗は、非情なまでに、くつきりと分かれてしまった。

将来を嘱望しよくぼうされていた山鳴剛三は、両親に切望され帰郷し、田舎医者として故郷の村に埋もれていった。彼の才を惜しんだ洪庵は、お気に入り、八重の手縫いの羽織を餞別に贈った。

一方の大戸郁蔵は洪庵と養子縁組をして、緒方郁蔵と名乗った。もともと郁蔵は、人と和さないところがあり、適塾でも浮いていた。

会読かいどくに参加せず、ひとり酒を飲み書を読んだ。

けれども蘭書の翻訳では、郁蔵は洪庵の右腕だった。

洪庵のライフワークとなった大著「扶氏經驗遺訓ふしけいけんいくん」の翻訳は、郁蔵との二人三脚で成し遂げられた偉業だ。

その郁蔵は服装に全く構わないので、見かねた八重が紋付き袴を

縫って与えたこともある。

そんな郁蔵を心配した洪庵は、彼を独立させ、自分の塾を持つように差配した。

「適塾」から分かれた「独笑軒塾」は「南塾」とも呼ばれ、本家「北塾」と並び称されるほど、栄えた。

「独笑軒塾」の名は、郁蔵にはひとり酒を飲みながら読書をするのが唯一無二の楽しみで、そうした時には思わず笑ってしまう、ということからつけられたものだ。

その構造は、洪庵が長年憧れていた華岡流と瓜二つのような建て付けとなった。

華岡流は華岡青洲が率いる本家、和歌山「春林軒」しゅんりんけんと分家となる弟・鹿城の大坂「合水堂」がつすいどうがあった。

浪速では蘭学が隆盛していたが、漢方医も巻き返しを図っていた。折衷派ながら漢方の旗頭と目された合水堂も、劣勢を挽回すべく、紀州から切り札のエースを投入していた。

華岡青洲の娘婿で天才外科医として名高い華岡南洋なんようが大坂・合水堂に合流したのは、大塩平八郎の乱が起こった直後の天保八年（一八三七）で、洪庵が開塾する前年のことである。

合水堂はかび臭い漢方医の巣窟そうくつだと、反感も持つ蘭方医もいた。だが若い頃、華岡流に憧れた洪庵は、独自の路線で医を極めるそ

の姿勢を尊敬していた。加えて、蘭方医も実際の治療に用いる薬物は漢方が多い。

医業を成すには、漢方の素養は必須だったのである。

洪庵は、外科が苦手だった。武士のくせに血を見るのを好まなかったのだ。

なので外科治療が必要だと診立てると、迷わず合水堂に送ったのだった。

その頃、「適塾」には塾生が殺到していたが、経営は苦しかった。貧しい塾生を大勢受け入れたばかりでなく、寄宿までさせたのだから、それは当然だろう。

けれども新妻の八重は、平然としていた。

「天游先生の塾でのさだ奥さまのご苦勞を思えばこれくらい、どうということもあらしまへん。どうか、ひとりでも多くの塾生を導いてさしあげてください」

八重は健気けなげにも、洪庵にそのように言った。

その言葉は洪庵にとって、どれほど心強かったことだろう。

八重は父・百記から、天游塾の内情を聞いていた。そして洪庵が、天游とさだを理想の夫婦とみていることも知っていた。

だから八重は、自分もさだのようになりたいと切に願っていたのだ。

学塾は繁盛したが、洪庵の医業はあまり流行はやらなかった。それは長崎の時と同じだった。

——私は、患者の気持ちを掴つかむのが、下手なのかもしれない。

反省はしてみるが、もって生まれた性質いかんは如何ともしがたい。洪庵は、人気ある医業を営むことを、早々に諦めた。

このため修学を柱とする適塾が、活動の主体になっていく。

そうした姿勢は亡き師・天游と似ていた。天游の遺児、中耕介こうすけは、長崎留学を終えた時、青木周弼もとの許で修学するため長州へ旅立っている。天游の「思々齋塾」は従弟の伊三郎が継いだから、耕介にはそんな選択も許されたのだ。

伊三郎は、耕介が一人前になって戻ってきたら、中家の医業を継がせるつもりでいる。

洪庵は、オランダ語の基礎を教えつつ、自分の仕事として、蘭医書の翻訳に励んだ。

内科学の翻訳書は、杉田玄白げんぱくの弟子の宇田川玄随げんずいの「内科撰要ないかせんよう」、その養子の宇田川玄真の「医範提綱」、洪庵の師・坪井信道の「診候しんこう大概たいがい」、そして高野長英たかのちようえいの「医原枢要いげんしうよう」など名著が多数あった。しかし病理学には簡易な抄訳しよやくがあるばかりなので宇田川玄真は、いくつかの書物を編纂へんさんして病理学の総論を出そうとした。

だが彼は志半ばで亡くなってしまったため、後事は愛弟子の洪庵

に託された。

洪庵はそれをこなしつつ、「フーフランド」の内科書の翻訳にも取りかかっている。

翻訳では洪庵は、平易な文体を心がけた。高踏こうたう的な美文調の翻訳が主流だったが、理解するのが大変で、蘭語を訳した日本語をさらに噛み砕かないと意味が通じないこともあった。

だがそんなことをしたら二度手間になってしまう、と洪庵は、合理的に考えたのだ。

終生の友で漢学の師ともなった、国学者の広瀬旭莊ひろせきよくせうと知り合ったのもこの頃である。

洪庵は漢学にも親しみ、研鑽けんさんを続けた。

それは師・宇田川玄真の方針でもあった。

その頃、西を見れば、京ではシーボルト門下の日野鼎哉ひのていたいが開業し、名医との評判だった。

東の江戸では両国の薬研堀やげんぼりに開業した「和田塾」という蘭学塾がすこぶるよい、という評判が漏れ伝わってきた。

洪庵は武者震むしやぶるいをした。

——この勝負は絶対に負けるわけにはいかない。

洪庵にしては珍しく、そんな風に自分を鼓舞こぶしていたのであった。

この当時、蘭学を志す者は多様な動機を持ち合わせていた。中でも多かったのは蘭学を修学して、どこぞの大名に藩医として召し抱えられ、一旗揚げようという若者たちだ。

徳川幕府は長い間、強固な身分制を堅持けんじすることで体制を維持していた。

やがて開国の足音が近づくと、確固たる身分制社会も揺らいでいく。

だが、鎖国が崩れつつあった天保年間のこの頃は、体制はいまだに強固で健在だった。

蘭学を学び医家になることは、雄志を抱く青年が出世するための数少ない道のひとつであり、手っ取り早い立身りっしんへの道だった。

だから「適々斎塾」には身分が低く貧しい、だが意気盛んな若者が集まった。

その身分も、旗本から貧農ひんのうまでと、さまざまな者たちが集っていた。

若者の常として、無法者むほうものぶっつていきがる者もいた。

塾生同士の揉め事や、裕福な士族の師弟が集まる「合水堂」の塾生との諍かやいいも少なくない。

そんな混沌とした塾生たちを正道に導いたのは、洪庵の徹底した学究的姿勢と、慈母じぼのように塾生に接した八重だった。

「奥さまは故郷のおつ母さんのようだ」

塾生にそんな風に言われた八重は、負けじと言り返す。

「お母はんだなんて、憎らしいこと言うわね。せめて姉さんにしたつてや。朝餉あさげのおかずを一品、減らしたるか」

こんな風にして、八重はよく喋り、よく笑った。塾生にも分け隔てなく接した。塾生もそんな八重に、気安い思いを抱いた。

そうこうしているうちに結局、姉ではなく、塾生の母という呼び方が定着してしまった。

八重は塾生にとって、何でも心置きなく言うことができる、気安い母なのだった。

洪庵は血気に逸りはや、行き詰まって風穴を開けたい、ともかく若者に、かつての自分の姿を重ね見ていた。だから小言こごとは少なかつた。

けれども怠なまけている塾生は厳しく叱った。

時を無駄に過すごすことがどれほどの損失か、身に染みて感じていたからだ。

勉強を強要することはなかったが、自身は深夜まで蘭書と取り組んだ。

塾生は二階の居室から見下ろす師の書齋の丸窓に、いつまでも灯りが点いているのを見て、発憤はつぷんし勉学に励んだ。

洪庵という厳肅な父、八重という優しい母に見守られ、塾生とい

うひな鳥たちはすくすくと育った。

こうして「適々齋塾」は、いよいよ盛んになっていった。

八重と祝言を挙げた翌年の天保十年（一八三九）七月、洪庵は足守藩主から三人扶持を賜った。

足軽より軽い捨て扶持だが、俸禄ほうろくを得たことは藩に認められたというだけで誇らしかった。

それ以上に洪庵にとつては、故郷の両親が喜んでくれたことがなにより嬉しかった。

けれども世の中では、蘭学の隆盛に対する反発が蠢うごめき始めていた。

その年の天保十年五月十四日、老中・水野忠邦みずのただくにによる、幕政史上最大の思想言論弾圧事件となる「蛮社ばんしやの獄ごく」が勃発ぼつぱつした。外国船の来訪が頻繁になり、幕府の海防政策に対する批判が盛んになったため、それを抑え込もうとした反動的な行為だった。

それは当時、無人島おがさわらだった小笠原諸島に無許可で渡航を計画したとして蘭学者ら八名を逮捕したことから始まった。

やがて幕府の政策を批判した冊子を書いたことがお咎とがめの理由となり、言論弾圧事件に変質していった。

その中心にいた首魁しゅかいが高野長英たかのちかひでだった。

彼は麴町こうじまちの貝坂かいざかに開塾し、蘭医学を中心に講じていたが、次第に

社会改革を実現するという方向へと、その軸足を移していく。

天保四年（一八三三）、世が天保の大飢饉に襲われると、長英の目には、医学中心の蘭学者は出世主義の権化に映った。

長英を取り巻く人々は、医学派の下町連と事務官僚派の山手連に分裂していった。

そして山手連を中心にした「尚齒会」を結成し、各藩の重要施策を研究討議する会になっていく。長英は著作「二物考」で、飢饉を救う食物として早蕎麦と馬鈴薯を推奨した。

そんな長英はやがて政治、外交の分野でも、独自の論を展開し始める。

これがお上に対し不敬だと問題視されてしまった。

こうして、江戸時代最大の蘭学弾圧事件「蛮社の獄」が始まった。

田原藩家老・渡辺崋山が書いた「慎機論」と、高野長英が書いた「夢物語」という小文が、弾圧の対象になった。

仙台藩医・小関三英は、高野長英と同窓の鳴滝塾生だ。「西医原病略」などの医書の翻訳を手がけたが、気が小さくお咎めを気に病み、長英と崋山の二人が入獄した直後に自刃している。

渡辺崋山もまた、郷里で謹慎した二年後に自刃してしまう。

高野長英は伝馬町の牢に入獄後、弘化元年（二八四四）に、牢の火事による一時赦免に乗じて脱獄した。

「蚕社の獄」の前の江戸は、蘭学に対する雪解けの時期だった。

幕府天文台に「蕃書和解方」ばんしょわけかたと呼ばれる蘭書の翻訳部門があり、

宇田川玄真、杉田立卿りゆうけい、宇田川榕庵、小関三英など俊英の蘭学者が局員に就任していた。

そのおかげで洪庵も、特別の計らいで、新たな蘭学の聖地に入りをさせてもらっていた。

だが「蚕社の獄」は、そんな順風満帆じゆんぷうまんぼんで、我が世の春を謳歌おうかしていた蘭学界に冷や水を浴びせることとなった。

これを機に、状況は一変して、蘭学を取り巻く環境はたちまち暗転していった。

江戸にいた坪井信道は、「蚕社の獄」は幕府に異を唱える反体制派への弾圧であり、直接的な蘭学抑圧ではないので心配する必要はない、と大坂の愛弟子・洪庵に書き送っている。

だがわざわざそんなことを書き送ったこと自体が、蘭学に対する圧力で逆風であることを、ひしひしと感じていたからに他ならない。

以後、世は「蘭学抑圧時代」へと突入していく。

そしてそれは嘉永七年かえい（一八五四）、幕府が日米和親条約を締結して、事実上「鎖国令」てつこくめいを撤廃し、開国へと舵かじを切るまで、十五年という長きにわたって続いたのだった。